

特集 比較研究の地平

シンポジウム／第六七回研究例会「口承文芸モチーフの分布と伝播」

日本における「人の死の起源」

モチーフとその世界分布

——ベリョースキンのコンピューター・データ
ベース活用の一事例として

直野 洋子

1 データベースの概要

ロシアの著名な民族学者・神話研究者ユーリー・ベリョースキンのデータベース「世界神話・フォークロア——モチーフのテーマ分類と地域分布。分析カタログ」^①については、すでに本誌三四号で簡単に紹介しているが（直野 二〇一一）、ロシア語でしか読めない部分が多いので、あらためてその全容を解説するとともに、活用法を探ってみたい。

二〇一五年十月の時点で「序言」には次のように書かれている（抄訳）。

このサイトは毎年一回、1月に更新される。毎年数千の新しいテキストの要約がカタログに追加され、その総計は約五万に上る。大多数はゲルマン系、ロマンス系、スラブ系、バルト沿岸・フィ

ン系言語の出版物からとられているが、未刊の資料もある。^②

二〇一五年一月十五日までに、一九五二のモチーフの九一四の伝統（地域）における分布が調べられた。新資料を検討するたびに、新しいモチーフが区別されたり、伝統が細分化されることにより、この数値は増加していく。ロシア、ウクライナ、カザフ、中国のフォークロアの解像度は最も低い。こうした膨大な資料群をより小さな地域に分割するためには大掛かりで特別な作業が必要である。

モチーフにはアルファベットと数字が振られ、アルファベットはテーマ的大項目を表す。多くのモチーフが複数の項目に係しているが、所属している項目は一つだけである。どの文字や数字で記されているか、すべてのモチーフは同等である。コンピューター検索に際してこれは重要ではない。

一部のモチーフにはS・トムソンのモチーフインデックスの番号（例えばA736.141）、より多くの場合はアールネ・トムソン・ウターの話型索引の番号（例えばATU565）が示されている。このような一致は近似的なものが多く、個々のモチーフについては、もっぱらカタログに付されている定義によつて判断しなくてははいけない。

モチーフ名称の後ろの数字列（52.53.55等）はテキストの採録地域を示しており、^③地域番号は「10南西アフリカ」から「75ティエラ・デル・フエゴ」^④までであるが、統計計算に際してはより小さな九一四地域を用いている。

カタログは作業中であり、それが完成形になることはないし、なりえない。活用を望まれる方は関心のある資料を調べてほしい。おそらくあなたの具体的なテーマに応じた調整、修正、追加が必要になるであろう。

ベリヨースキンは英語論文「フォークロアと神話のカタログ——その構成と調査研究のための潜在力」(Barkin 2015)の中で、このカタログは人間の過去を研究するために作られたストックであり、きっかけは考古学者として、モチエ文化の土器や壁画に描かれた神話的場面を理解するために南米インディアン⁽⁵⁾のフォークロアデータを自己流に体系化し始めたことであった、と書いている。一九九〇年代半ばからロシアの基金の助成を受けているが、それはデータベースそのものではなく先史時代についての情報取得のためなので、「(話例の) テキストを完全に英訳する余裕はとてなかつたが、この欠陥を緩和する何らかの方法が見つかることを願っている」とのことである。もつとも論文末尾では、自分と身分不安定な若手の助手以外にデータベースを修正・発展させることのできる者はおらず、「このプロジェクトが自分の死後どれだけ維持されるかは不明だ」と危機感を表明している。

トムソンのモチーフインデックスについては、どこにでもある普遍的な単位と地方限定の単位が混在し、統計処理に向かない、できたとしても環境と(物質)文化の間の類似や差異(相関)を明らかにするだけで、口頭伝承相互のそれを明らかにす

るものではない、またA T U 話型索引については、テキストの帰属する民族がヨーロッパ以外ほとんど示されていない、エピソードの記述が恣意的に省かれている、といった欠点を指摘し、先史時代の情報交換や人類の移動を研究するためには、別の新たなデータベースを構築する必要があつたと説明している。

その利点のひとつは膨大で多様なデータを統計分析にかけられることであり、因子分析などの統計処理の方法の概略と、分析結果の実例を示している。もうひとつの利点はグローバルな研究方法である。西ユーラシアのフォークロアを外から眺めることにより、かつては視野に入らなかつた大陸横断的な平行関係を見だし、アメリカ移住、オーストロネシア族の拡散等に関するモチーフ分布の規則性も明らかになったという。このデータベースは本来、考古学者や比較言語学者、遺伝学者の関心に応えるために設計されたものだが、より後代の歴史に関する情報を得るため、またタイポロジー研究、地域研究の資料としても使え、計り知れない潜在力を秘めていると、ベリヨースキンは強調している。

実際のカタログを見てみると、縦に2分された画面となつていて、左欄には下記の大項目ごとに、「A1 往古の太陽」、「A2 Aいくつかの太陽が大地を焼く」といったモチーフ名が列挙されている。モチーフ名をクリックすると、右欄にそのモチーフの定義、当モチーフを持つ民族・地域名、地域・民族別の例話の粗筋、出典が出てくる。

右欄の上端に「序言」(上に抄訳)、「参考文献」、「民族と地域」

のページへのリンクがはられていて、文献の前半はロシア語、後半はラテン文字の文献リストになっている。「民族と地域」の中で、日本は「琉球から千島列島」という地域名で示され、「1 アイヌ、2 古代日本、日本人（伊豆諸島含む）、3 琉球北部（日本他の地域にモチーフがない場合は九州南端も）、4 琉球中部、南部（八重山、宮古、沖縄）」という民族・地域グループに分けられている。日本の現在の行政区分では、南西諸島のうち「3 琉球北部」は鹿児島県に含まれる奄美諸島以北に、「4 琉球中部、南部」は沖縄県にあたる。

・カタログの大項目

- A 太陽と月
- B 周囲の世界の特質の起源
- C 大災害（カタストロフ）
- D 火と笑い
- E 人間と文化の起源
- F 性とセックス
- G 豊穡、農耕
- H 失楽園
- I 超自然的物事、手段、存在
- J 報復者・英雄 アメリカインディアン・サイクル
- K 冒険 I (1) 英雄の偉業
- L 冒険 II (1) 怪物と悪霊

M 冒険 III いたずらと事件

以前にモチーフの分布を世界地図に表示できる英語のページがあると書いたが（直野 二〇一一）、残念ながら現在は作業中で非公開、ただし近い将来に公開したいとのことである（Betzkin 2015）。幸い、モチーフリスト（番号・名称・定義）の英語版はネット上で別に見ることができる。しかし、カタログ右欄の各モチーフの採録地域名・民族名や話例の粗筋が英語で読めるようにならない限り、このデータベースの活用は広まらないと思われ、なんとも歯がゆい。

2 モチーフ「人はなぜ死すべきものとなったか」の世界分布

ペリヨースキンは、二〇〇九年の著書『旧世界から新世界へ…世界諸民族の神話』（モスクワ）において、約6万年前アフリカを立出した現生人類がユーラシア大陸に広がり、ベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸に拡散するまでの長い道のりを参照しつつ、世界中の神話の分布を論じている。二〇一三年には、人類誕生の地、アフリカの神話をテーマとした著書『アフリカ、移住、神話…歴史的観点から見たフォークロアモチーフの分布域』（ペテルブルグ、三二〇頁）を刊行している。その中で、「死の起源」神話の一部は、アフリカ立出の時に人類がすでに語っていた神話の最重要のものであることがあらためて確認された。本稿では、モチーフ「人はなぜ死すべきものとなったか」の中

で日本に類話のあるものを中心に取り上げ、その世界分布と日本の類話との関係を検討してみたい。

検討の前提となる人類の移住史とアフリカの歴史のポイントを、主に上記二冊の著書にそって次にまとめる。

- ・ 七万五千～六万二千年前 人類の第一波がアフリカを出立し、東南アジア、オーストラリアに到達。
- ・ 六万～一万年前 アフリカは乾燥した気候になり、サハラ砂漠によって熱帯アフリカ以南が他の地域から隔絶される。
- ・ 四万年前 中国、日本に存在の証拠。
- ・ 三万八千～二万四千年前 第二波がアフリカを出て、アジア、ヨーロッパへ到達。南アジア、東南アジア、メラネシア、オーストラリアで第一波のグループと混交。
- ・ 二万年前 一部は東アジアから西へ向かい、北ヨーロッパのバルト海に到達した可能性。
- ・ 二万～一万年前 最終氷期最盛期（LGM）
- ・ 一万五千～一万年前 様々なグループの人類が氷河に覆われ陸続きだったベーリング海峡を渡ってアメリカに移住。
- ・ 紀元前六千～五千年以降 近東から技術等がアフリカへ伝わる。
- ・ 紀元後 アフリカのバントゥー族等農耕牧畜民が南へ大移動、採集狩猟民（コイサン族）は南西部の砂漠地帯か、農耕民の間の飛び地に残る。ラクダの利用でユーラシア世界との交流が強まる。

・ 紀元後数世紀 アフリカ東岸にインド洋海域のアジア文化が到達。

・ 七世紀以降 アフリカ東岸沖のマダガスカル島に東南アジアからオーストロネシア語族が移住。

ペリヨースキンは、このような人類の移住史を踏まえ、南米・中米で一般的なモチーフの多くが東アジア・東南アジアでも見られ、一方で北米インディアンに特徴的なモチーフがシベリアに多いことから、二つのモチーフ群を再建し、それぞれ二万五千～一万七千年前のアジア太平洋沿岸、一万二千～一万五千年前の南シベリアで知られていたはずだと推論している。

ペリヨースキンによれば、アフリカには他地域に比べ宇宙論、起源論的神話が少ないが、その中でも多数を占めているのは死の起源を説明するもので、数十の話例がある。動植物の物質的特徴の説明はまれで、栽培植物の起源説話もない。星辰神話も未発達である。アフリカの採録話の大半が動物の姿形をした主人公のトリックスター説話で、人間が主人公の冒険譚も多いが、その多くがユーラシアと共通のものであり、ユーラシアから西南アジア経由で、あるいは南アジア・東南アジアからアフリカ東岸を通して入ったと考えられる。

他の大陸で見られる基本的な「死の起源」モチーフはほぼ全てアフリカに存在し、アフリカ以外で最も多いのは、インド（インド・アーリア人を除く）、東南アジア、オーストラリア、オセ

アニア、つまりアジアの太平洋沿岸とアメリカである。アンデス山脈より東側の南米でも「死すべき人間」のテーマは大変人気がだが、このモチーフが宇宙論の中で中心的な地位を占めているのはアフリカだけである。

アフリカ南部のコイサン族とオーストラリアで見つかった少数の共通モチーフは、アフリカ南部がサハラ砂漠によって隔絶される六万年前以前に伝わったことになるので、人類移住の第一波と関連づけられる。A 41「鳥が他の鳥に自分のヒナを殺させる」A 36「月と不死」H 10「沈没した石」などのモチーフである。一方、移住の第二波と関連するのはH 4「不死の条件としての脱皮」H 11「神の声」H 36 H「失敗したジャンプ」I 119「死者が大地を揺する」H 36「虚偽の知らせ」などのモチーフである。

ペリョースキンが挙げている上記のモチーフの中から、日本でも見られるものを選んで詳しく紹介したい。モチーフ名称と定義はペリョースキンのカタログから引用した。モチーフ名の英訳とトムソンのモチーフインデックスの番号も付す。

・ H 4 不死の条件としての脱皮 Shed skin (D)1889.6. 脱皮による若返り。「皮(樹皮、服)を替える者は不死(永遠に若い)」。最も広まっただけで識別容易なモチーフ。アフリカでは中央部、東部に集中。ユーラシアの影響を受けていない南部のコイサン族にはないので、移住第二波と関係づけることが可能。東地中海と近東では古代に知られていた(ギルガメシユ叙事詩他)。H

4 A 中斷された再生「近親者が再生した人の新しくなった外貌をわからない、再生時に驚かせる(その結果人間は脱皮しなくなる)」というディテールがアフリカ、インドネシア、メラネシア、南米に共通(図1参照)。

・ A 36 月と不死 The immortal Moon「月が不死なるものとして死すべき人間に対比される。人間が死すべきものになるべきか決定を下す。月に住んでいるものには不死。」アフリカ、東南アジア、オーストラリア、アメリカの伝承を結びつけ、コイサン族でもよく知られている。共通するのは「月と不死」という観念だけ。「脱皮」と並び、熱帯のほぼ全域に特徴的。他の「死のモチーフ」は「虚偽の知らせ」を除き、これほど多くない(図2参照)。

・ H 9 丈夫なものど脆いもの Strong and weak「人間は何か弱いもの、脆いもの、たやすく破滅、腐敗してしまうものになぞらえられた結果、死すべきものとなる(病気になる、老いる)。」アフリカでは東部に集中し、東南アジアに最も多く、両者でのみ石とバナナが対比されているので、東南アジアからマダガスカルに入ったのは確実。シベリアのマンシと西エヴェンキにも、インドネシアと類似の話があり、南方の住人が氷期以前も以降もシベリア移住に参加した証拠の一つである。

・ H 36 A 虚偽の知らせ・死の起源 Origin of death from the falsified message (A)1335.1. 改ざんされたメッセージによる死の起源。「ある人物が指示や何か物を渡すため派遣される。使者は伝達内容をゆがめる、違う物を運ぶ、運んでいる物をなくす、遅

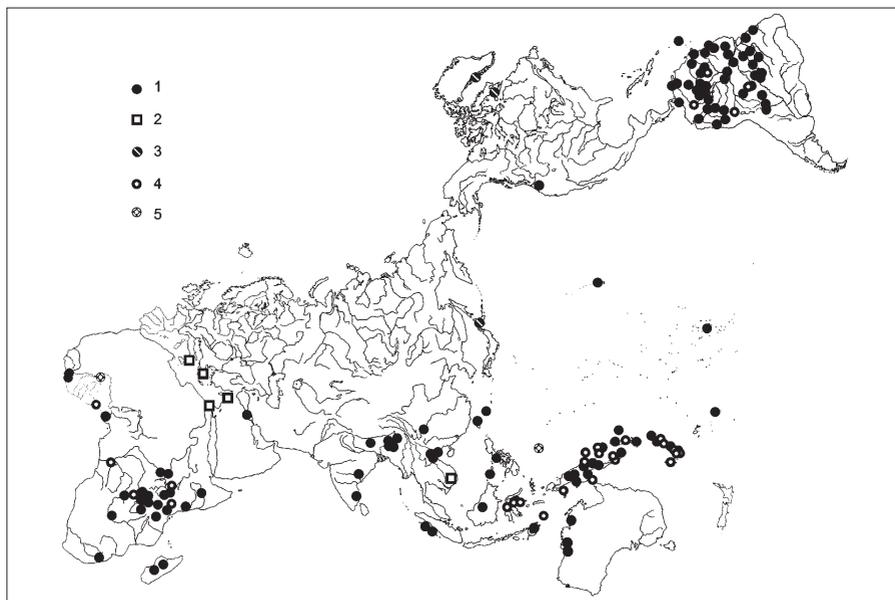


図1 「不死の条件としての脱皮」 H4 (1)人間は脱皮して若返ることができないので死ぬ。(2)蛇は脱皮して若返ることができるので不死(死の起源の説明なし)。(3)人間一般ではなく特定の人物が脱皮し若返る。(4)老人を脱皮の最中に驚かせ、人間は若返ることができなくなり死ぬ(H4A)。(5)(4)と同じだが若返りは脱皮と関係ない。

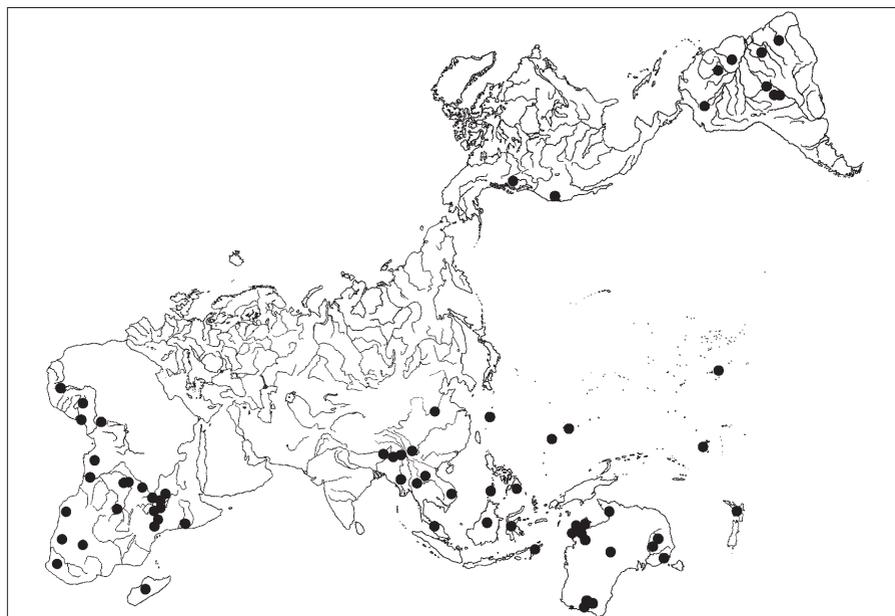


図2 「不死の月」 A36月が不死なるものとして死すべき人間に対比される。人間が死すべきものになるべきか決定を下す。月に住んでいるものは不死。

れる（別の使者に追い抜かれる）。その結果人間は死すべきものとなる（死後生き返らない）。アフリカで一番普及しているモチーフで、サハラ以南とナイル流域で記録されたテキストの三分の一を占め、「死の起源」と結びつかない**H 36**「虚偽の知らせ」の他のバージョンは皆無である。アフリカ以外で「虚偽の知らせ」が「死の起源」と結びつくことはかなりまれで、どちらかと言えば北ユーラシアに特徴的。「死の起源」と結びついていない類話は、インド東部・北東部、ミャンマー、中国、インドシナに集中している。たとえば**H 36 G**何回食事をとるか「神が、一日に一回など少ししか食事をしないでよいと人間に伝えるため使者を送るが、使者は頻繁に食べなければいけないと伝える」というモチーフなどが見られ、これは南米アンデスにも特徴的である。（図3

参照）

インド・太平洋地域や南米にも「死の起源」バージョンはわずかに存在するが、アフリカのものとは構成が大きく異なっている。アフリカでは、「不死になる」と人間に伝えるために派遣された人物が、その内容をゆがめたり遅れたりし、その間に別の人物が「死ななければならぬ」と人間に伝える。アフリカに典型的な「使者自身が率先して内容をゆがめる」という話と同じなのはアルメニアとインド北東部のアパタニ（アルナーチャル・プラデーシュ）だけである（アルメニアの悪役は蛇かワタリガラス、アパタニでは猿かセンザンコウ）。ラオスの黒タイ族とベト族では蛇が使者を脅して「不死が約束されているのは人

間ではなく蛇だ」と言わせる。他の全てのバージョンはアフリカと著しく異なり、たとえば、不死に関する神の決定ではなく、蘇生法の指示の問題であったり、不死をもたらす何らかの物質、霊薬の喪失が語られたりしている。これらはアフリカから持ち込まれた後にアジアで誕生したと考えられる。

・ **H 6 B** 不死の霊薬が植物にかけられる「人間に不死を授ける物質が指示通りに届けられず、植物にかかり、植物は常緑、再生可能、あるいは実を結ぶようになる」「虚偽の知らせ」と主に西アフリカ、シベリア・中央アジア地域で結合。西アフリカの主人公は山羊、犬、ネコ（非伝統的な動物）、アルタイ、プリアート、モンゴルでは、大陸ユーラシアで死のテーマと固く結びついているエジプトハゲワシやワタリガラスである。

次のような仮説が立てられる。「偽の知らせ」はアフリカ起源の他の「死のモチーフ」とともに、三万年前かそこらに南アジア、東南アジアに入った。南・東南アジアでは、アフリカ起源の話をもとに新しいものが誕生し、その中には死すべき人間の性質の説明に直接関係するものもそれ以外のものもあった。この新しい物語はその後アジア全体に広まった（シベリアの神話と南・東南アジアの神話の関連は数多い）。その後、一万年頃前から（非伝統的な動物を伴う）「偽の知らせ」新バージョンがアフリカに戻り、伝統的なものと混交した。

上に出てくる蛇とワタリガラスは、死のテーマに関わる重要

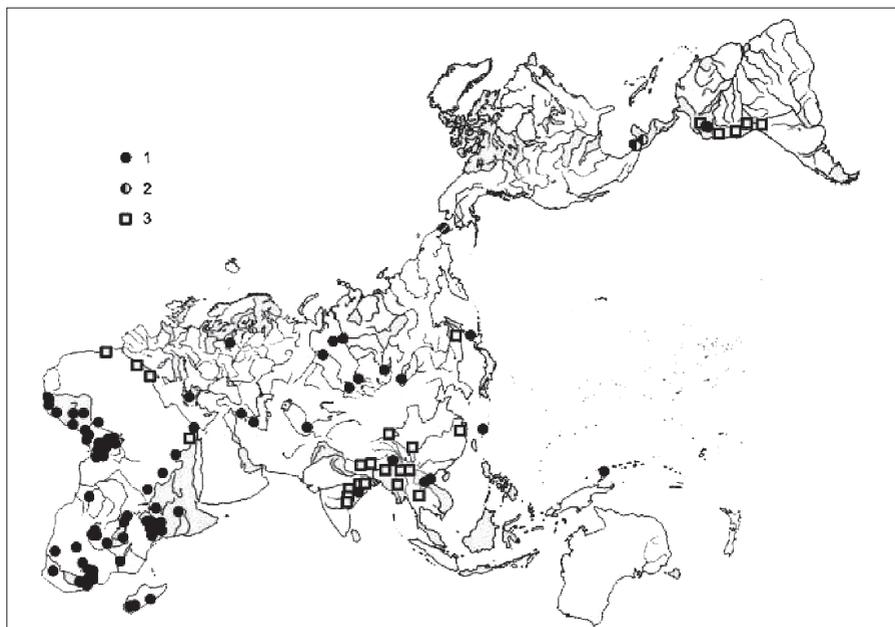


図3 「虚偽の知らせ」H36 ある人物が指示や何か物を渡すため派遣される。使者は伝達内容をゆがめたり、違う物を渡したり、持参物をなくしたり、遅れたりし、使者本人や人間にとって重大な結果をもたらす。(1) 死の起源、H36A。(2) 人間全体の死すべき宿命ではなく、ある個人の死の原因。(3) その他の起源譚。

な動物としてペリヨースキンの特別な考察の対象となっている。日本の類話にも関係しているので、要約して紹介したい。参考のため、テキストの一部もカタログから転載する(図4参照)。

「偽の知らせ」のアルメニアの話では、神は「死者は経帷子を着古したら家に戻るべし、つまり生まれ変わる」と人間に伝えるよう翼のある蛇を遣わした。ところが蛇は人間に石(墓標)を使い古すよう事実上不可能なことを命じた。神は蛇を罰し翼を奪った。別のバージョンでは、同様に伝言をゆがめたのはワタリガラスであり、その咎として神は死肉を食べるよう命じた。ワタリガラスと蛇が、このプロットのテキストの基本的な意味を変えないまま互いに交代可能な人物であることがわかる。ワタリガラスを人間の死の張本人とするモチーフは、ユーラシアでは沿海州やモンゴルからアイルランド、エジプトまで広がっているが、南の地域ではほとんど知られていない。一方、サハラ以南のアフリカ、アジアのインド太平洋地域、南米では、「死の動物」は概しては虫類と無脊椎動物である。ユーラシアの南北でフォークロア・神話モチーフのセットが異なっていることは、この地域に移住した人々の出身が異なっていたことを証明している。

南西アジアに関して言えば、ここへも紀元前二千年以降、

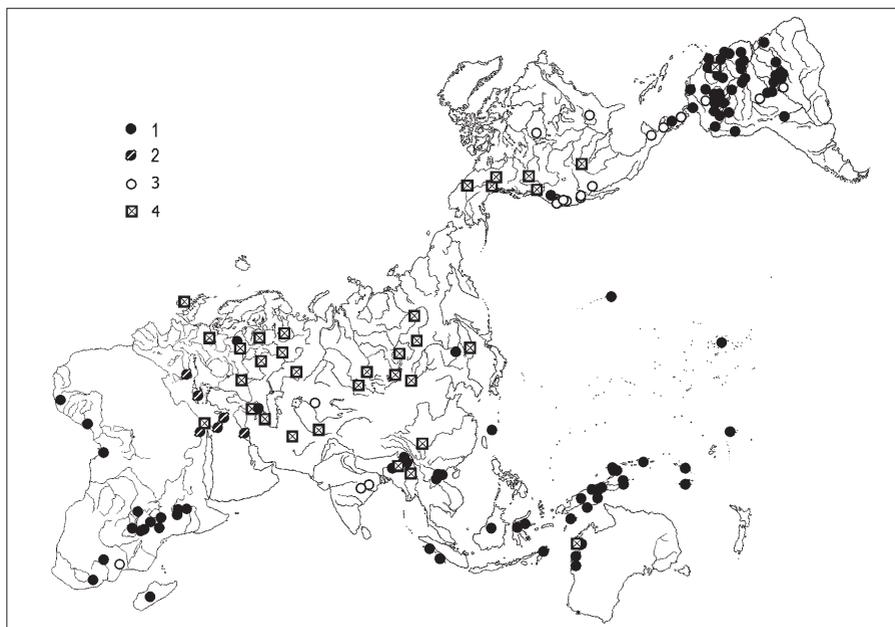


図4 カラスと蛇 (1)死の出現の原因となるもの、あるいは不死なるものは、は虫類か無脊椎動物。H5 フォークロア記録。(2)同上。古代の文献。(3)蛇に咬まれたことが最初の死の原因とされるが、蛇が死の出現の原因と見なされているわけではない(このヴァリエントはH5にも含まれている)。(4)カラスが死の出現の原因とされる。カラスは人間を滅ぼそうとする。カラスは不死で、不死の水を運んでくる(H6C, H36f)。

北方の住民、まず印欧語族(少なくともインド・アーリア人とイラン人)、その後チュルク人とモンゴル人が進出してきた。百年前にイラン東部で記録された話は「ギルガメシュ叙事詩」によく似ているが、違いは不死の奪取者が、前者ではワタリガラス(カラス)、後者では蛇であることだ。この一千年の間に、近東では、ワタリガラスはとりわけ死・不死の観念と結びついた形象として、完全に蛇を追いやった。蛇からワタリガラスへの交代は、この三、四千年の間に起こった、この地域の文化における深甚な変化、以前には近東や中東で知られていなかったモチーフの大陸ユーラシアの深部からの拡散を反映している。

ギルガメシュ叙事詩の結末「ギルガメシュは死の秘密を知ろうと、世界を囲む連山の裂け目を抜ける。(中略)不死のウトナピシテムが住む島にたどりつき、洪水の物語を聞き、その援助で永遠の若さの花を海底から手に入れる。ギルガメシュが眠っている間に、蛇が花を盗み、巢穴に戻りながら脱皮する。ギルガメシュは若返りの力を自分に(そして人間全てに)ではなく蛇のために手に入れたことを嘆き悲しむ。」

イラン東部「西方のカフ山近くの、永遠の闇に覆われた場所ゾオマトに命の水の泉がある。回りの土は熱く、通るにはハヴィイ・ヒズラの同意が要る。ハヴィイ・ヒズラはアレクサンドロスと四十人の騎士に許可を与

え、足を火傷しない方法を教えた。アレクサンドロスは容器を満たし、明るい所に出ると容器を枝にかけた。カラスが飛んできて水を飲み、容器をひっくり返して木にかけ、木は常緑となり、カラスは不死となった。」(Donaldson, Bess Allen 1938 The Wild Rue. A Study of Muhammadan Magic and Folklore in Iran. London)

3 モチーフ「人はなぜ死すべきものになっただか」の日本の話例

まずペリヨースキンのカタログに掲載されている日本の話例を引用する。⁽⁷⁾上記著書 (Березкин 2013) では特に取り上げられていないが、H 6 b b 「失われた手段」(ある人物が人間にとつて必須の道具や物体を届けるために派遣される。使者はそれを無くしたり、別の物を届けたりする。通例、死後再生の能力に関わる)と H 6 D 「盗まれた不死」(不死を叶える手段を入手した後眠り込む。その間に他の人物がそれを盗む)にも、下の A 36 ①のネフスキー採録話がかつていいる。⁽⁸⁾

・ H 4 不死の条件としての脱皮

①宮古島「節祭しちの前夜、人間は蛇より先に若返りの水を浴びて若返った。翌年蛇に負けて蛇の後で浴びた。蛇は若返り、人間はそれ以来若返らない。人間は蛇のように脱皮して若返っていた。(類話 人間は手と足だけ洗ったので、爪が伸びる)」ネフスキー『月と不死』

②アイヌ「錦の大蛇が人間を喰い、建物を呑み込む。女性に変身して、獵師を誘惑しようとする。獵師が拒否すると、喰わないが、千年生きるように命じる。獵師は百年ごとに皮、髪、歯を脱ぎ捨て、赤子に戻る。十回目になってやっと獵師は死に果てる。ある人がこの蛇を殺したが、その死体からスズメバチや刺すアリが発生した。」Batchelor 1927, No. 3d: 30-31 (=1927: 146).

・ A 36 月と不死

①宮古島「月がアカリヤザガマシジミズに変若水シニミズを入れた桶を与え、地上に遣わす。人間には変若水を、蛇には死水をかけるよう命じる。地上に着くと眠り込んでしまい、蛇が変若水を浴びてしまう。彼は動転し、死水を人間に浴びせ、天に戻る。月は彼を罰し、それ以降、桶をかかえて月に立っているよう命じる。」ネフスキー『月と不死』(→ H 4 + H 36 A + H 6 b b)

・ H 9 丈夫なものと脆いもの

①古事記「天照大神が天界から地上へあまつひこひこほのくににぎのみこと天津日高日子番能邇邇このはなのさくやびめ命を遣わす。木花之佐久夜毘売いわながひめに会い、その父は喜んで結婚に合意、彼女とその姉、石長比売いしながひめを与える。花婿は姉が醜かったので返す。父は「そのせいで天神たちの子孫の命は岩のように永遠ではなく、木の花のように短くなるだろう」と言った。」

②日本書紀「天照大神の孫が高天原から天下る。木花開耶姫イフナガヒメを妻に選び、その醜い姉の磐長姫イフナガヒメを断る。違う選択をしたら、人

間は永久に生きてであろう。」

③アイヌ「創造主が人間を造る方法を探るため、天の神へ雀を遣わす。(答えは)木(柳)から。後から神は考え直し、石から造るよう伝えるべくカワウソを遣わす。カワウソは道草して魚を捕る。木でできた人間は死すべきものとなる。天の神は罰としてカワウソの顔を踏みつける。」Eter 1949: 22-23 (+ H 36 A)

④アイヌ「コタン・カル・カムイ(国造神)が人間を造る方法を探るため、天の神へ雀を遣わす。神は、木からと答える。後から神は考え直し、石から造るよう伝えるべくカワウソを遣わす。しかしカワウソは魚を捕るために道草をして遅れる。そのせいで人間は死すべきものとなるが、そのかわり成長し子孫を残す。神が激高してカワウソの頭を踏みつけたので、(顔が)平たくなった。人間は柳からできているので、老人になると柳のように腰が曲がる。」Mashiko 2002: 4. (『知里真志保著作集』一九七三、一九六頁) (+ H 36 A)

・ H 36 A 虚偽の知らせ・死の起源

- ①宮古島↓A 36
- ②アイヌ↓H 9
- ③アイヌ↓H 9

次に日本昔話通観タイプインデックスで上記と類似したモ

チーフを探すと、四八七「ひばりと生き水」、四八八「蛇と生き水」の二つの話型を確認できた。タイプごとに、その梗概、対応するトムソンのモチーフ・インデックス番号と名称(「」内、一部略)、話例を所収する都道府県ごとの巻号と話の番号、タイトル、対応するペリョースキン・カタログの番号と類話数を記す。最後に怪異・妖怪伝承データベース^⑩で見つけた俗信も紹介する。ペリョースキン・カタログのH 4 A 「中断された再生」の「脱皮中に近親者に見られると、脱皮(再生)できなくなる」という話を連想させ興味深いものである。

・通観タイプ四八八「蛇と生き水」

神様が蛇を憎んで殺そうとし、二つの桶に生き水と死に水を用意して、動物たちに、どちらかを浴びよ、と伝える [D1242.1 魔法の水]。賢い蛇は一番に来て生き水を浴びるが、他の動物は遅く来て死に水を浴び、蛇は脱皮をくり返して生き続け、他の動物は早く死ぬようになる [A1320 寿命の決定、A2483.1 蛇はなぜ脱皮するか、A1338.0.1 呪物によって年をとらなく、他]。

沖縄県(二六巻五五〇)「蛇と生き水」

H 4 県内類話四編(通観タイプ四八七の二編※含む。)

(H 4 + H 36 A + H 6 b b 通観二七巻「補遺」四八八「蛇と生き水」一編*↓本来通観タイプ四八七に該当する)

・通観タイプ四八七「ひばりと生き水」

月と太陽がひばりに人間まで生き水を届けさせるが、ひばりは途中で水を放り出していちぢくを貪り食う [B29] 使者としての動物・D1242.1 魔法の水・他。そのときに蛇が生き水を浴び、蛇は脱皮して長生きするようになる [A2483.1 蛇はなぜ脱皮するか・D13380.1 呪物によって年をとらない・他]。人間はひばりに残り水を届けられ、手足の爪にかけて爪が生え変わるようになる。ひばりは月と太陽にいきさつを報告し、罰に縄でしばられ、体が小さく足が細くなる。

沖繩県 (二六卷五〇三) 「ひばりと若水」

H 4 + H 36 A + H 6 b b 県内類話十三編〔補遺〕四八八の一編*含む)

H 4 + H 36 A + H 6 b b + A 36 県内類話四編 (月と関わりがあるもの。ネフスキーの A 36 ①含む)

(H 4 県内類話二編※「節祭で賭けや競争で人間が蛇に負ける」ネフスキーの H 4 ①含む。↓本来、通観タイプ四八八に該当する)

鹿児島県 (二五卷九三「人の世の起こり」の参考例) 鳥 (弘法大師) が蛇に生き水をかけ (人間に死に水をかけ)、蛇は脱皮し続け、人間は死ぬようになった。

H 4 (+ H 36 A) 県内類話二編 (奄美諸島)

福島県 (七卷六七三) 「鳥の生き水」カラスが釈迦に頼まれ、不老不死の薬を人間に渡すために使いに出るが、途中で木の上で休んだ時、一声鳴いたので、くわえていた葉が木の根元にこ

ぼれる。それで、木は千年万年と長生きするが、人間はすぐ死ぬようになる。人間が死ぬと、カラスは申し訳なくてガオガオと詫び鳴きをする。

H 36 A + H 6 B + H 6 b b 県内類話二編

・怪異・妖怪伝承データベース

岩手県東磐井郡 (0640546) 「むけの朔」(俗信) 人間も一年に一回脱皮するという伝説があり、むけの朔 (六月一日) に人が脱皮するのを見ると死ぬといわれている。(H 4)

4 まとめ

3で挙げた日本の類話を総括すると、ペリヨースキン・カタログに載っていないものが全部で二十四例見つきり、そのうちの十八例は沖繩県西部、先島諸島のものであった。二十三例で(生き)水が再生の手段として使われ、二十一例で蛇が人間の代わりに水を浴びてしまい、脱皮して再生する能力を得るが、残り二例の福島の話だけは、樹木が水をかけられ再生能力を得る。しかも福島の話では、蛇ではなくカラスが登場しているのが注目される(役割は異なる)。全三十四例のうち、二十二例で「死の起源」と「偽の知らせ」が結合しており、失敗する使者は十例でヒバリ、福島のみ二例だけカラス、他は(後に罰として月に水桶を持って立たされることになる)人間や弘法大師などである。

ペリヨースキンの「死の起源」モチーフの解説に照らして検討すると、「天や神からの使者が運んできた水を浴びて、蛇が脱皮するようになり不死となる」という組み合わせが、日本以外に欠けていることに気がつく。ペリヨースキンのカタログで検索したところ、世界中の「H 4 不死の条件としての脱皮」のモチーフで「水を浴びることによる脱皮」が確認されるのは南米だけである。もっとも、怪物の棲む湖に入る、熱湯を浴びる等の試練を経ることで再生能力を得る話（H 8 「試練に耐えられなかった者たち」）であり、水自体に霊力があるわけではない。

沖繩を中心に数多く伝えられてきた伝承では、青白い月光にゆらめく神聖な水が運ばれ、夜陰から這い出した蛇がその水を浴びてしまい、人間から永遠の命を奪う… お腹が減ってつまみ食いしただけなのに、使命を果たせなかったヒバリは神様に罰せられて小さくなり、鳴きながら天地の間を上下するはめになる… 鮮やかなイメージと情感に彩られたこの物語は、琉球で独特の結実を見たものかもしれない。つまり（H 4 脱皮 + H 36 A 虚偽の知らせ + H 6 b b 失われた手段）というモチーフ結合で、その手段が「命の水」であるような組み合わせは沖繩のみ見られるのではないだろうか。さらに現生人類の初期の移住者に遡りうる A 36 「月と不死」という古いモチーフもよく結びついており、派遣者として月だけではなく太陽が出てくることも多く、アルカイックな印象が増す。

一方で福島にわずか二例ではあるが、H 6 B 「不死の霊葉が

こぼされる」と「虚偽の知らせ」が結合し、使者としてカラスが登場する話は、シベリアや中央アジアに広まっているものと共通し、沖繩とは別ルートで、北方から日本に渡ってきたものとも考えられる。

もう一つのモチーフ、日本昔話通観では見つけられなかったが、ペリヨースキンが古事記やアイヌの伝承に見出した H 9 「丈夫なものと脆いもの」は東南アジアに広まっているものとされ、その来歴にも興味を惹かれる。このモチーフも、古事記、日本書紀と違って、アイヌの伝承では H 36 A 「虚偽の知らせ・死の起源」のパターンになっており、総じて日本の民衆にはアイヌから琉球まで「天からのお使いのヘマによって人間は死ぬようになってしまった。だからお使い（カワウソ、カラス、ひばり等）は罰を受けて今こうなんだよ」という話の人氣が高かったようである。

このように、ペリヨースキンの世界的なモチーフ分布に関する研究やデータベースと照らし合わせることにより、日本の口頭伝承研究にも多くの示唆が得られるのではないかと考える。今回の検討対象は主にペリヨースキンのカタログと日本昔話通観に限られていたので、見落とした重要な話例などがあればぜひ指摘していただきたい。ペリヨースキンのカタログに優るとも劣らない、約六万話という膨大なデータを掲載している日本昔話通観であるが、目当ての話例を探すのはなかなか大変である。その点、パソコンで検索できるペリヨースキンのカタログ

のメリットは大きい。今夏、ベリョースキン先生にお会いする機会があり、三〇巻もの日本昔話通観という索引があることをお話ししたら、ただ感嘆しておられた。どちらのカタログも英訳され、ネット上に公開される日が来れば、口承文芸研究は飛躍的に進展し、さらにはベリョースキン先生の目的とする人類の先史時代の解明にも大いに貢献するのではないだろうか。日本には南、北、西から人々とともに、また文物とともに多様な物語、モチーフがもたらされ混ざり合い、独自の発展を遂げ、それが世界最大級の索引にまとめられている。世界中の研究者がこの宝庫にアクセス可能になる意義は小さくないと思う。

注

- (1) <http://www.ruthenia.ru/folklore/berezkin/> (ロシア語)
- (2) 二〇一五によれば、六千以上の書籍・論文が使われている。
- (3) この地域番号は内部作業用の情報で、相関表(統計処理)に使用していない番号は欠けているなど、不完全なものだとのことである。
- (4) 南米最南端の諸島。なお、二六番は中国、韓国 Kirai, Korea、三八番が日本 Шония となっている。
- (5) 紀元後一〇〇〇〜八〇〇年にペルー北海岸にあった文化。
- (6) World mythology and folklore: thematic classification and areal distribution of motifs. Analytical catalogue

<http://ruthenia.ru/folklore/berezkin/eng.htm>

(7) ベリョースキン・カタログの事例の典拠

- 古事記 一九九四年のロシア語翻訳
日本書紀 一九九七年のロシア語翻訳
ネフスキー『月と不死』(東洋文庫一八五)一九七一年(ロシア語版 一九九六年)
Batchelor, John 1927 Ainu Life and Lore. Echoes of a Departed Race. Tokyo: Kyobunkwan. 448 p. (参考) シー・バチエラ『アイヌ人及其説話 上編・中編』教文館(1901年)
Etter, Carl 1949 Ainu Folklore. Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan. Chicago, etc.: Wilcox & Follett. 234 p.
Mashiko, Machiya 2002 "Raven and the hidden sun. A comparative study of the raven cycles along the Northwest Coast of North America with special reference to the crow myths in East Asia". Paper presented to the International Symposium "The Raven's Arch: Jesup North Pacific Expedition Revisited". Sapporo, October 24th-28th, 2002. 22 p. (参考) 益子待也「フタリガラスと太陽 シェサップ領域における日光解放神話」『国立民族学博物館調査報告No.82 渡鴉のアーチ (1903-2002) : シェサップ北太平洋調査を追証検証』(二〇〇九年)

(8) ベリヨースキンのカタログと違って、ネフスキーの原典で

は「アカリヤザガマが非常に疲れ、草臥れて脚脛を休ませようと思つて担いで来たその桶を、道に下ろし路端で小便をしていた処、その隙に何処からともなく一匹の大蛇が現れて来て：」となつてはいるが、「使いが途中で休んで眠ってしまったと、その間に蛇が巢出水の桶に入つて水浴びをする」となつてはいる話例（現宮古島市の池間島 二六卷八〇八ページ類話6）もある。

(9) 日本昔話通観第二八卷 昔話タイプ・インデックス 稲田浩二 同朋舎 一九八八

(10) 国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承データベース <http://www.nichibun.ac.jp/youkaido/search.html>

(11) 本稿完成後にネット検索で「若水を運んでいたチンチン鳥がカラスに襲われ、こぼれた若水を浴びたサルスベリの木が若返り、人は死ぬようになった」という奄美群島加計呂麻島の話例をサイト「和漢百魅岳」で発見し、出典を問い合わせたところ、『旅と傳説』第六年五月号（一九三三年）のロシア文学者・昇曙夢の巻頭エッセー「島の思ひ出—かけろま歳事記—」に行き着いた。福島の話例と似ているが、ここではカラスは使者ではなく蛇と同じく妨害者の役回りである。北方的伝承が南西諸島まで達していたことの証であろうか。なお、チンチン鳥とはキセキレイのことと思われる。

参考文献

篠田謙一 『DNAで語る日本人起源論』 岩波書店、二〇一五

直野洋子 「ユーリー・ベリヨースキンの世界神話研究」 『口承文芸研究』 三四号、二〇一一

直野洋子 「DNAと神話モチーフで人類史をたどる—ベリヨースキンの世界神話研究」 『なろうど』 六二号、二〇一一

『日本昔話通観』 全三十一卷 稲田浩二・小沢俊夫責任編集 同朋舎出版、一九七七一—一九九八

ベリヨースキン、ユーリ 「環太平洋における日本神話モチーフの分布」 (山田仁史訳) 丸山顕徳(編) 『古事記・環太平洋の日本神話』 勉誠出版、二〇一一

Berezkin Yu. E. *Folklore and Mythology Catalogue: Its Lay-Out and Potential for Research. Between Text and Practice. Mythology, Religion and Research A special issue of RMN Newsletter No.10. University of Helsinki, Summer 2015*

Berezkin Ю.Е. Из Старого в Новый Свет. Мифы народов мира. М., 2009.

Berezkin Ю.Е. Африка, миграции, мифология. Ареалы распространения фольклорных мотивов в исторической перспективе. СПб., 2013.

(なおの・よらう) / ロシア口承文芸学)